

フィールド風

(現場)からの

宮田守男

夏から秋に移る今頃の空を「行き合いの空」と表現する言葉がある。行く季節と来る季節が出合う事を指し、地上ではまだ暑さが厳

しくても、高い空から少しずつ涼気が染み込んで来ることを気付く情緒ある表現だ。だが曇天が続く今年は、朝晩が一気に冷え込み今年の冬の到来は早いのかと思わせる。

立春から数えて毎年9月1日頃は「二百十日」。爽りの秋の季節を迎え大切な時期だが台風が襲来しやすい頃で気の抜けない日々でもある。この二百十日前後に吹く暴風を慣用語で「野分」と言い、暴風が吹くと稲の収穫が台無しになり農家にとって厄日とされた。

呼んだようだ。歌人の与謝野晶子の随筆に「台風と云ふ新語が面白い」とあるのが当時を表しているのだろう。野分から台風と表現される気象情報だが、異常気象が続発する現状から、次はどんな呼称が誕生するのか興味深い思

いだ。秋野菜の播種の時期だが毎日続く曇天に適期播種に気がかりだとの声が続いてくる。日本は食料受給率が低く、国産率の高い野菜の種は90%海外で生産されている事はあまり知られていない。

表現する字句が興味深い

ぜひ店頭の野菜種の袋の裏側を見てほしい。意外な国名を見つけた事ができるはずだ。

は、自家栽培の種の確保さえ困難で、実質的な食糧受給率は恐ろしい程低い。今、世界規模で起こっている気象変動で、干ばつ状況や洪水被害が多発している。もっと私たちが食料に関心を高め、消費者も、地元や国内産の

食料の購入に関心を持ってほしいと願っている。

毎年楽しみにしているサラーイマン川柳。「8時だよ 昔は集合今閉店」「ウィルスも上司の指示も変異する」が今年の1位と2位の作品

作品も生でどの活を切り取り、思わず、ニヤリとさせられる。だがこの人気のコンクールの名称も今回が最後だ。主催する第一生命保険は、次回から「サラッと二句私の川柳コンクール」に衣替え。「サラーイマン」の響きに特定のイメージがある年代には寂しい限りだ。しかし社会の多様性により、当たり前に使っていた字句が替わって行くのも時代の流れなのかもしれない。



8月最終日曜日、岩岳ゴンドラリフトの運行状況が賑わいを伝えている

(信州地域社会フォーラム会員・白馬村森上)